平成26年度　ふくしま復興展

発掘された大堀相馬焼

―まほろん収蔵資料を中心として―

（平成２６年４月２６日発行）
展示期間　平成２６年４月２６日（土）
～６月２９日（日）
会　　場　まほろん特別展示室
（福島県文化財センター白河館）
〒961-0835
福島県白河市白坂一里段86
TEL　0248-21-0700（代）
FAX　0248-21-1075
ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ　まほろん　検索

展示の開催にあたって

「ふくしま復興展」は、ふるさとに育まれた文化を広く紹介し、福島県民の「こころの復興」を応援する企画です。

第１回目の今回は、福島県の代表的な伝統工芸品である大堀相馬焼について、福島県文化財センター白河館（まほろん）の収蔵資料を中心とし、主に江戸時代から明治・大正時代にかけての製品や技術を紹介します。

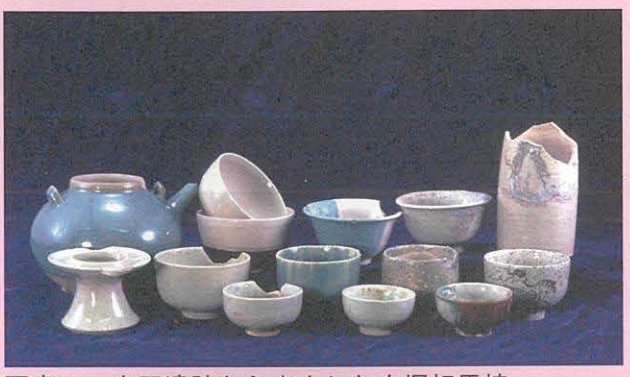


写真１　中平遺跡から出土した大堀相馬焼

大堀相馬焼の歴史

大堀相馬焼は、福島県浪江町大堀地区を中心に、江戸時代から生産されてきた陶器である。

元禄３年（1690）に相馬藩領大堀村の左馬（さま）が陶器づくりを学び、主人である半谷休閑（はんがいきゅうかん）に伝えたのが始まりという。休閑は、これを人々の生活の手段として役立てようと、村人たちに伝授した。

こうして始まった大堀村の陶器づくりは、その後、相馬藩の注目するところとなり、藩の保護下で成長を遂げていく。その結果、日用雑器を中心とする大堀相馬焼は東北地方を中心に広く流通し、益子焼（栃木県）や笠間焼（茨城県）、成島焼（山形県）などにも影響を与えたという。

しかし、明治時代になると藩の庇護は失われ、江戸時代末期には100軒を超えたという窯元も激減し、大堀相馬焼は存亡の危機に瀕することとなる。しかし、残った人々は様々な創意工夫を重ねて新たな製品を生みだし、その販路を国内外へと広げていった。

その後、大堀相馬焼は不況や戦争、震災などの困難も乗り越え、現在に受け継がれている。

年　表

元禄３年（1690）	左馬が陶器づくりを学ぶ 半谷休閑が村人に技術を伝える
元禄10年（1697）	相馬藩が陶工の他領移住を禁止
元禄14年（1701）	相馬藩が陶器づくりを奨励
享保18年（1733）	相馬藩が他領産陶器の販売を禁止
文化元年（1804）	相馬藩が瀬戸役所を設置
文政３年（1820）	相馬藩が近藤陶吉郎を召抱える
天保元年（1830）	近藤陶助が隠元型土瓶を創始 半谷滝三郎が絵付研究を進める 駒絵描き、筒描き技法が始まる
慶応元年（1865）	近藤尊景が白掛土瓶を創始
明治元年（1868）	天野兼重が手びねり雅物を創始
明治６年（1873）	松永政太が勿来焼を創始
明治16年（1883）	水金による駒絵技法が始まる
明治24年（1891）	志賀定之進が安心型土瓶・白ひび焼を創始
明治27年（1894）	坂本熊次郎が二重焼技法を創始
明治41年（1908）	皇太子殿下行啓の際に志賀金三郎が駒絵の金焼付を実演
大正４年（1915）	登窯に代わり棚窯を導入
昭和37年（1962）	足げりロクロから電動ロクロへの切替えが始まる
昭和45年（1970）	大堀の全窯をLPガス窯に改造
昭和46年（1971）	相馬焼協同組合（現・大堀相馬焼協同組合）結成
昭和53年（1978）	国の伝統工芸品に指定される
昭和63年（1988）	創業300年祭式典開催

※『大堀相馬焼創業三百年記念誌』より作成

発掘調査の成果から（中平遺跡・後田Ａ遺跡・仲禅寺遺跡）

○中平遺跡（浪江町大堀字中平）

中平遺跡は、昭和63年度（1988）の国営請戸川農業水利事業に伴い発掘された遺跡である。調査地の南区で、幕末から明治初期にかけての物原が見つかり、浪江町における大堀相馬焼に関する考古学的調査の端緒となった。

物原からは、整理箱にして約250箱分の陶器・窯道具類が出土した。それらの多くは小破片で、欠損品や窯変品も多いことなどから、焼き損じの廃棄品であると考えられる。

出土陶器類は、碗などの食卓用品、土瓶などの調理煮沸用品、灯明皿などの灯火具が中心で、碗類には灰釉、土瓶には灰釉・銅緑釉などと器種ごとに釉薬を使い分けていたようである。また、胎土は緻密で、比較的薄手の製品が多く、良質の粘土が使用されていたことが分かる。

現代では一般的に生産されている青ひびの陶器は出土せず、鮫肌釉を用いた勿来焼も少ないことから、主に江戸時代から明治時代初めにかけての大堀相馬焼の技術をうかがい知ることができる。

写真２　中平遺跡で発見された物原

写真３　中平遺跡より出土した大堀相馬焼（碗）

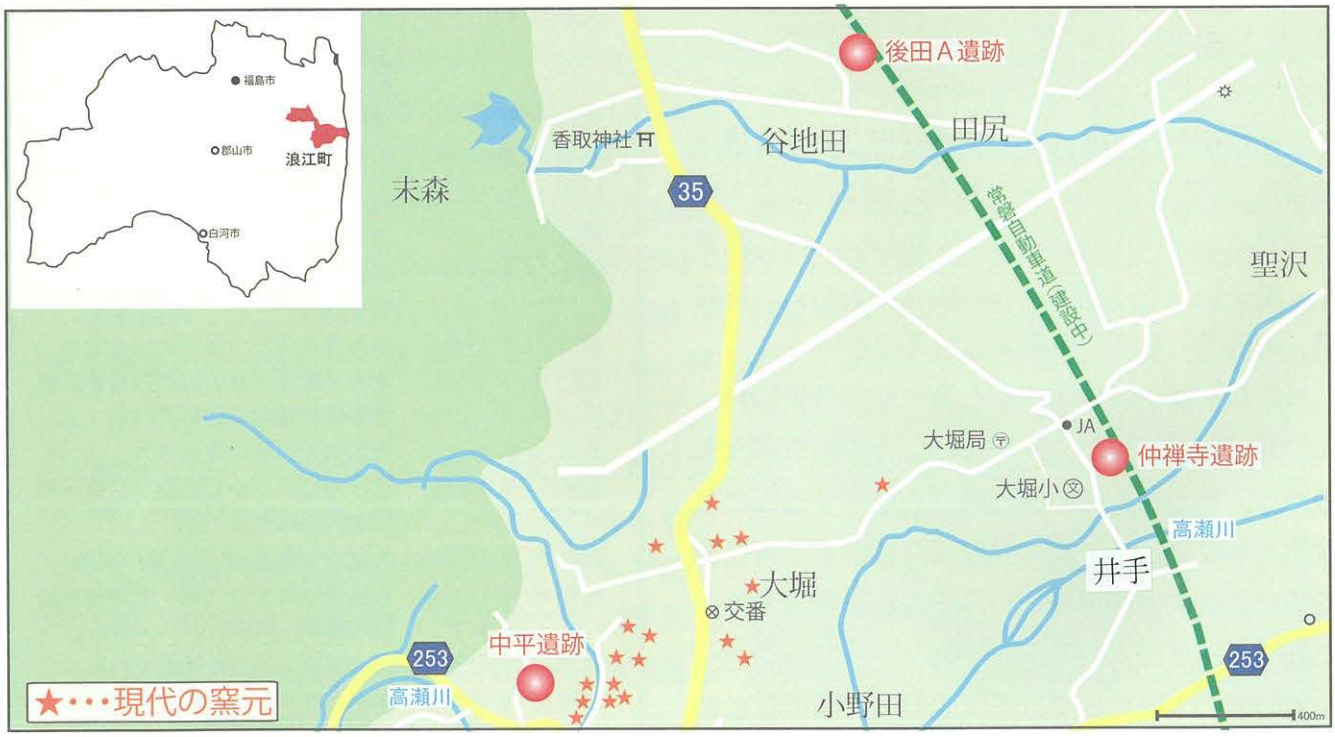


図１　浪江町の遺跡分布図

○後田（うしろた）A遺跡（浪江町田尻字後田）

後田Ａ遺跡は、平成 18・20 年度（2006・2008）に常磐自動車道の建設に伴い発掘された遺跡である。江戸時代後半から大正時代にかけての陶器窯跡、土坑、掘立柱建物跡、物原などの遺構が確認された。

調査区全体から整理箱にして約 160 箱の遺物が出土し、そのうち 95%を陶器が占めている。遺構と器種の関係をみると、窯跡では碗が９割以上を占めるが、土坑では約半数に留まり、遺構外からは甕や壺類が多く見つかるなどの違いがある。また、中平遺跡の出土品と比べて、碗の形状に変化が乏しい半面、土瓶には多様な形態が認められる。

やや小ぶりな登窯のほか、粘土の保管などを行っていたと考えられる遺構も見つかっており、陶器と付着した窯道具（トチン）などと合わせ、生産の様子をうかがい知ることができる遺跡である。

写真４　後田Ａ遺跡で発見された物原

写真５　後田Ａ遺跡より出土した大堀相馬焼（土瓶）

○仲禅寺（ちゅうぜんじ）遺跡（浪江町小野田字仲禅寺）

仲禅寺遺跡は、平成 18 ～ 20 年度（2006 ～ 2008）に常磐自動車道の建設に伴い発掘された遺跡である。江戸時代後半から大正時代にかけての陶器窯跡や物原などが発見され、整理箱にして約 20 箱分の遺物が出土した。

出土品のうち、陶器については食卓用品・調理煮沸用品・灯火具が主体であり、器種については他の２遺跡と大きな違いはない。一方、窯道具についてはトチンよりも焼台・ツメが多いという特徴がある。とくに、焼台については、窯元や屋号を示す刻印や記載がみられ、複数の窯元が共同で窯を使用していたことをうかがわせる。

明治時代に創始された手びねり雅物（がぶつ）や鮫肌釉の勿来焼が出土していることを考え合わせると、相馬藩の庇護がなくなり窯元が減少した明治・大正時代における生産体制の変化を解明する手がかりとなる遺跡といえよう。

写真６　仲禅寺遺跡で発見された陶器窯跡

写真７　仲禅寺遺跡より出土した焼台

現代の大堀相馬焼

昭和５３年（1978）２月６日、大堀相馬焼は国の伝統的工芸品に指定された。その特徴は、「伝統的な技術又は技法」により、「伝統的に使用されてきた原材料」を用いて、浪江町において製造すること。つまり、江戸時代以来の陶器生産の伝統を引き継ぐ「浪江町」という土地に根差した工芸品であることに重要な意味があった。

平成２３年（2011）３月１１日に発生した東日本大震災とそれに続く福島第一原子力発電所事故は、そうした大堀相馬焼の根幹を揺るがすものであった。最大震度６強の揺れによって多くの作品は破損し、窯元たちは原子力災害のために今もなお避難生活を余儀なくされている。300 年にわたり浪江町で育まれた大堀相馬焼は、いま最大の危機に直面している。

たとえば、大堀相馬焼の特徴である青ひびは、町で採れる砥山石（とやまいし）を原料とした青磁釉（せいじゆう）を使用する。浪江町での採掘ができない以上、その風合いを完全に再現することは困難である。しかし、それでも窯元たちは諦めなかった。福島県の支援を受けて代替釉薬の開発を進め、平成 24 年（2012）４月には二本松市内に共同窯を建設した。また、避難先で製作を再開する窯元も増えており、復興に向けた動きが進んでいる。

もっと知るために（参考図書）

高橋良一郎著
『相馬のやきもの』（福島中央テレビ、1977 年）

山形万里子著
「奥州相馬藩における陶業生産の展開」『日本歴史』第 468 号（1987 年）

大堀相馬焼協同組合編刊
『大堀相馬焼創業三百年記念誌』（1988 年）

関根達人著
「相馬藩における近世窯業生産の展開」『東北大学埋蔵文化財調査年報』10（1998 年）

野馬追の里原町市立博物館編刊
『相馬のやきもの』（1999 年）

山田秀安著
『大堀相馬焼の歴史』上下（蒼海社、2001・03 年）

財団法人福島県文化センター編
『福島県文化財調査報告書』208（1989 年）

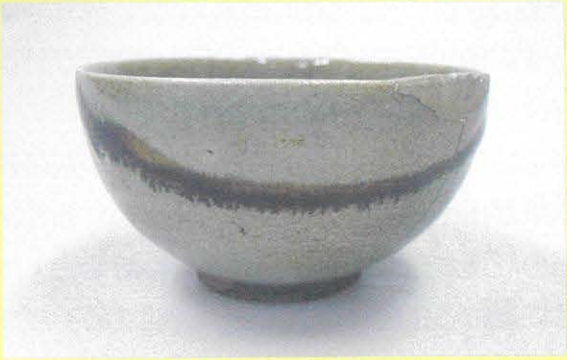
財団法人福島県文化振興事業団編
『福島県文化財調査報告書』453（2009 年）
『福島県文化財調査報告書』460（2009 年）
※いずれも福島県教育委員会ほか刊

大堀相馬焼の消費地遺跡について

大堀相馬焼の生産や流通などについて詳しく知るためには、出荷され使用された消費地遺跡にも目を向ける必要がある。

消費地遺跡は、福島県内外で確認されており、県内では今神遺跡（新地町）や宮田館（郡山市）などが知られ、県外では仙台城跡などが挙げられる。特に、仙台城二の丸跡の発掘調査・出土品については、関根達人氏によって調査・研究されており、ここではその成果を紹介したい。

発掘調査では、元禄年間（1688 年～ 1704 年）の整地層から灰釉丸碗が出土し、大堀相馬焼の創業がその時期まで遡ることが判明した。また、出土品の研究からは、年代が下るにつれて器の形や組み合わせが変わり、商品構成の大きな変化が江戸時代後期にあったことが示される。それまで主軸商品であった碗類が減少し、土瓶などの煎茶器、徳利などの酒器、行平鍋などの調理具、さらには植木鉢といった多種多様な商品が流通していたことが明らかとなっている。



今神遺跡出土陶器（小碗）